

【編集後記】

起業現場におけるメンター（助言者）の重要性——「ビジネスプラン・コンテスト」の意義

今年で6年目となる「元気わかやま——ビジネスプラン・コンテスト」の公開プレゼンテーションと審査・表彰式が、先般、和歌山市のプラザホープ4階ホールで開催された。コロナの影響で、開催自体、危ぶまれたというが、参加者、関係者の細心の対策で無事に遂行した。三密を考慮し、例年より入場定員は少ないものの、昨年まで「一般の部」のみであったが、今年初めて「学生の部」を新設したこともあり、次代を担う高校生ら若者の姿も多く、フレッシュな活気が感じられた。

このコンテストの目的は、県内の創業・起業家、あるいは本県にふさわしい新たなビジネスプランを発掘し、それぞれのテーマや段階に応じて、県内の経済団体や金融機関等支援機関による専門的、継続的な支援を行い、地域社会の活性化を図り、「元気わかやま」の実現をめざすものである。主催は、「創業支援セミナー in 和歌山」実行委員会（和歌山商工会議所・和歌山県商工会連合会・日本政策金融公庫和歌山支店・和歌山県信用保証協会・紀陽銀行・きのくに信用金庫・わかやま産業振興財団の7機関）で、県と和歌山市が後援している。

コンテスト応募の対象は、県内で今後1年以内の起業を検討している人や、県内で起業して3年未満の人、県に関わりのある学生等である。

開会の挨拶で、福田実行委員長は、「創業から閉鎖に至る会社の寿命は、帝国データバンクによれば、平均37.5年で、人間の一生に比べて短く、新しく創業する人を発掘」することが必要と述べ、戦後、家内工業で手袋編機を開発した島精機製作所を例に「第2の島精機をめざし、世界にはばたく企業に成長してほしい」とエールを送った。

さらに、後援の和歌山県企業政策局の北廣局長は、「県内の創業率は低位であったが、少し上昇してきたこと、県が取組む様々なスタートアップ支援施策、起業塾、インキュベーション施設の提供、資金援助、専門家派遣等をパッケージでサポートしている」ことを紹介した。

今回のコンテストには計51組の応募があり、1次、2次の選考を通過した8組（一般5・学生3）の応募者本人による各10分のプレゼン発表（緊張しつつも、それぞれ個性的な）が行われた。前日のリハーサルでは、語りたいたことが多すぎて、規定の10分を大きく超え、30分近くになった人もいたらしいが、何度も修正を重ねたとのこと。また、今年は、各プレゼンの後、審査員との質疑応答もあり、温かくも鋭い質問が投げかけられた。

審査は、「創造性・成長性・収益性・地域・社会貢献・プレゼン評価」の5項目で、8名の審査員の採点集計により、各部で最優秀賞、優秀賞、優良賞等を決定した。私も審査させていただいたが、白熱した選考であった。

「一般の部」の最優秀賞は、和歌山市出身で東京在住のIT企業に勤める男性による「デジタル技術活用による新たな旅体験の提供」に決定、賞状と副賞の賞金20万円を獲得した。彼の応募の動機は、県外に出て、和歌山の知名度や観光客数が、その魅力に反して、少ないのではと思ったからだという（例えば、ダイヤモンド社による「観光で行きたい都道府県ランキング2020」では、全国27位）。そこで、観光客と観光地情報をITで結びつける専属ガイドアプリや、AR/VR技術を活用し、在宅でも専用ゴーグルをつけて仮想空間で、臨場感ある旅行体験ができるサービスを提案した。今後、5Gの普及と連動して、拡大が見込まれるとしている。

また、優秀賞には、和歌山市でパン店を開業した男性による「和歌山県産柑橘酵母のパンで作るフレンチ総菜パン」が選ばれた。彼は、和歌山産柑橘類の廃棄される皮を大量に譲ってもらい、自家製酵母を培養して発酵させた生地でパンを焼く。特産の生姜を練りこんだものや、地元で獲れた猪や鹿などジビエを使った総菜パン…、かつてフランス料理店で働いた経験もあり、様々な理由で農家が出荷できない廃棄予定の農産物を用い、フランス料理の加工技術で付加価値を付ける。和歌山の食材を使い、食材を無駄にしないという。

優良賞には、山里の資源と都市部のニーズのマッチングを図る「新城・山里のめぐみ資源活用事業」が選ばれた。山里を自然と共生する場とし、獣害や耕作放棄地の増加、離農、雇用の減少を、消費に転換するしくみをつくる。付近は、県のサイクリングコースにも指定され、グリーンツーリズムの拡大を見込んでいる。

今回新設の「学生の部」では、最優秀賞に和歌山市の高校生のグループによる「自己紹介や名刺代わりになるLINEスタンプの制作・販売」が選ばれた。LINEスタンプのデザインコンテストを開催、アマチュア作家の登竜門とし、作品の著作権を取得して国内外に販売するという。

優秀賞には、同じく和歌山市の高校生グループによる「和歌山紀南の野菜・果物収穫イベント」と、新宮市の高校生による「紙でできたペットボトル容器」が選ばれた。前者は、ロケット発射場となる串本町を想定したもので、地元高校生との連携を図り、集客につなげる。後者は、環境貢献を目標に、素材をリサイクル紙や県産の木材、バイオプラスチックとし、飲料メーカーに売り込むという。

私の知人に、2度、起業した人がいる。純粋な営利事業でなく、衰退しつつある地域の課題をみつめ、振興へ誘導する社会益・共益的な分野で、最新のITを導入すれば、即解決というものではない。古い事情や人間関係が問題の根底に潜んでいたり、技術力や発想力よりも起業家の人間力のようなものが、起業の先行きを左右したりする。しかし、起業活動が進んでくると、なぜかうまく進まない、何が原因か、さっぱり分からず途方に暮れる。そんな時に、「視点・考え方」のヒントをくれたのが、彼が信頼するメンター（助言者・伴走者）であった。

彼は、メンターの重要性は語りつくせないという。自分の頭には全く浮かばない発想を示され、瞬時には理解できなかったが、真意が分かった後は、一生を支えるほどの幹になったという。その人に合ったよいメンターに巡り合えるかが、その後の事業の成否にも影響を与える。

起業経験をもつ人は、若くして起業の志を掲げる人に、先輩、メンターとして接してほしい。そして、この「ビジネスプラン」の主催者達も、専門的なノウハウをもつ力強い援軍であらう。 (谷 奈々)